

聖書箇所：第二サムエル記 10章 6～14節

説教：主はみこころにかなうことをされる

1 アモン人

1) ダビデの申し出を拒絶した

ダビデは、かつてサウルから追われていたことがありました。逃げた先々で、いろいろな人たちに助けられました。アモン人の王ナハシュもダビデが困っていたときに助けてくれたひとりです。それから年月が経ち、ナハシュが死んだとの知らせが届きます。ダビデはかつての恩を思い起こし、その息子ハヌンに恵みを施したいと考えます。ナハシュの葬儀に家来を送り、これを機会に両国の友好関係を深めたいというメッセージを送ります。

ところがハヌンはこれを素直に受けとめません。ダビデは一方の手で握手をしながら、もう片方の手で戦争をしかけてくるのではないか。そんなふうに疑ってしまい、ダビデが送った外交使節団を捕まえ、人々の見ている前でひげを半分そり落とし、服をはさみで半分に切って追い出してしまいます。「われわれは、イスラエルを敵とみなす。どんな結果になろうともすべてダビデに責任がある。」そんなメッセージをダビデにたたきつけました。

2) 戦争の準備

今日の箇所は戦争の話が中心です。でも、ここにも神の救いが語られているはずです。恵みはどこにあるのか。まず、ハヌンから宣戦布告されたダビデはどうしたか。そこから見ていきます。6節の最初の所。「アモン人は、自分たちがダビデに憎まれるようになっ

たのを見て取った。」

「憎まれる」と訳していることは、別のことばでは「評判が悪い」とも言い換えることもできます。アモン人のやり方を見たら、評判が悪くなるのは当然でしょう。こんなとき、普通ならどうなるでしょうか。「こんな仕打ちをされて黙っているわけにはいかない。」そう叫んで戦いの準備にとりかかる。もしそうしないなら、リーダーは弱腰であると批判され支持率は急落、政権が倒れることさえあります。

ダビデはどうしたか。ただちに戦争の準備をしたとは書いていない。むしろ真っ先に戦争の準備をしたのはアモン人です。多くの金を払って外国から兵隊を雇い、急速に軍事力を高め、槍の矛先をイスラエルに向けてきました。そこで初めてダビデは行動を起こさざるを得なくなった。そんな流れになっています。

なぜダビデはすぐに行動を起こさなかったのでしょうか。「手をこまねいてぐずぐずしていたから、アモン人に軍備を増強させるすきを与えてしまった。」そんな批判をされてもおかしくありません。ダビデは愚かだったのか。いいえ、彼は優れた軍人です。ダビデが動かなかったのには理由があります。10章2節をもう一度読みます。「ナハシュの子ハヌンに真実を尽くそう。彼の父が私に真実を尽くしてくれたように。」ハヌンの父親がダビデによくしてくれた、そのことがあるので、こちらから絶対に戦争をしかけてはならない。たとえひどい侮辱を受けたとしても、

真実を尽くすべきである。ダビデはそのように考えていたのです。

2 ヨアブ

1) 挟み撃ちにされる

とは言え、ハヌンがイスラエルを攻めようとしているのを見て、これ以上何もしないという訳にはいきません。将軍ヨアブとその弟アブシャイをリーダーとした軍隊をアモン人の町に向かわせます。敵が戦闘態勢を敷く前に、できるだけ早く敵の陣地に向かわなければなりません。順調にアモン人の町が見える場所まで前進しました。敵の攻撃を予想したのに、あっけないほど簡単に來ることができました。何かがおかしい。いやな予感がします。気がついたときはもう手遅れでした。すべてが「わな」だったのです。後ろにアラムの軍隊が隠れていて、挟み撃ちの状態にされていました。さすがのヨアブも、ここで軍隊は全滅するかもしれないと、覚悟したようです。

2) 軍を二つに分ける

ヨアブはどうか。9, 10 節にあります。「ヨアブは彼の前と後ろに戦いの前面があるのを見て、イスラエルの精鋭全員からさらに兵を選び、アラムに立ち向かう陣ぞなえをし、民の残りの者は彼の兄弟アブシャイの手に託して、アモン人に立ち向かう陣ぞなえをした。」

兵力を二つの分けました。一方は、すぐれた兵士だけを集めた少数精鋭の部隊で、こちらにはヨアブがリーダーとなり、うしろの方から迫ってくるアラム軍に立ち向かいます。残りの兵士たちは弟であるアブシャイをリーダーとして、前の方にいるアモン人の軍

隊に向かわせます。

3) 自分のために戦っていたヨアブ

そうしてからヨアブは弟にこう語ります。11, 12 節。「もしアラムが私より強ければ、おまえが私を救ってくれ。もし、アモン人がおまえより強かったら、私がおまえを救いに行こう。強くあれ。われわれの民のため、われわれの神の町々のために全力を尽くそう。主はみこころにかなうことをされる。」

ヨアブがどんな人であったのか、実を言えば複雑な問題を抱えていた人でした。まだ、サウルの家とダビデの家が王座を巡って衝突していた頃のことです。ヨアブにはふたりの弟がいました。ひとりは今日登場しているアブシャイ（アビシャイ）、一番下の弟がアサエルです。このアサエルは、あるときアブネルという将軍に殺されてしまいます。聖書にはそのあたりの事情が詳しく書かれています。アブネルは殺したくなかったのです。アサエルに「追うのをやめて早く戻りなさい」と何度も警告していた。けれどもアサエルが追うのをやめなかったためにやむをえず殺さざるをえなかった。そんな事情がありました。

でも兄であるヨアブはそんなことは関係ありません。アブネルが弟を殺したことを激しく恨み、あるときとうとう暗殺してしまいます。ちょうどその頃、アブネルはイスラエルの和平実現のために大変な努力をしていたときで、ダビデはアブネルを信頼し、大きな期待を寄せていたほどでした。つまり、ヨアブは自分の上司であるダビデに逆らって、自分勝手に行動したことになる。今なら国家反逆罪の罪に問われるようなことをしたのです。

ヨアブの人物像が浮かび上がってきます。ひとこと言えば、自分は誰のために戦っているのか、そういうことをあまり考えない人だったようです。イスラエルのために戦っているという意識は薄く、むしろ自分のために戦おうとする。そんな人でした。

3 主のみこころ

1) 人のためにいのちを捨てる

この戦いの結末は、イスラエル軍の勝利で終わります。そこだけ見れば「イスラエルが勝利することが主のみこころであった」という結論になります。確かにそれもあるでしょう。でもそれだけなのでしょうか。二つのことを見たいと思います。

先ほども言いましたが、ヨアブはかつて自分中心に生きていた人です。それが今どうなったか。ヨアブのことばをもう一度読みます。「われわれの民のため、われわれの町々のために全力を尽くそう。」

死ぬか生きるか、窮地に追い込まれたとき、ヨアブは自分が誰のために戦おうとしているのかを、はっきりと意識することになりました。自分のためとは言っていません。神の民のために戦うと言っています。神のために全力を尽くすならば、神はみこころにかなったことを必ずしてくださる。そのような信仰に導かれていきます。

ここに主のみこころの一つ目が示されています。

あなたは誰のためにするのか。自分だけよければよい。もしそう考えているのなら、人と人とは争い続け、戦争は止むことはない。けれども、もしあなたが神の民のためにいのちを捨てる覚悟があるのなら、地に平和がもたらされるであろう。そう教えています。

でも私たちはどうですか。ほかの人のためにいのちを捨てる。とてもできそうにありません。それよりも自分のために何かをしようとしします。ですからいつも人を傷つけてしまい、人から傷つけられてしまいます。いつもそのことで苦しんでいます。これが私たちの罪の現実です。

だから私たちには、主イエス・キリストが必要なのです。主は誰のために十字架におかかりになったのですか。ご自分のためでしたか。いいえ、私たちのためです。私たちが神に属する人々であると考えてくれた。ヨアブが告白した主のみこころは、主の十字架にそのまま現されています。

2) 救いの手を差しよべる

主のみこころに関する二つ目のことを最後に見ます。アモン人は結局どうなったのでしょうか。14節。「アモン人はアラムが逃げのを見て、アビシャイの前から逃げて、町に入り込んだ。そこでヨアブはアモン人を打つのをやめて、エルサレムに帰った。」

なぜ、アモン人を徹底的に滅ぼさないのでしょうか。疲れたから？町に入ったら攻めるのがむずかしいから？違います。ヨアブが主のみこころを知ったので、だからこれ以上追わないのです。

どんなみこころでしょう。アモン人の王であったナハシュがダビデにしてくれた親切。そのことのゆえに、たとえダビデに刃向かったとしても、それでもやはり神の恵みを受ける権利が残されている。それが主のみこころでした。

これに対して反論が聞こえてきそうです。11章1節で結局彼らは滅ぼされるではないか。そんな疑問です。よく考えてください。

そこに至るまでには半年あまりの時間があつたのです。その間にダビデと和解しようと思えばできた。なおアモン人には神の救いにあずかるチャンスが残されていた。それが主のみこころでした。

アモン人を私たちに置き換えて考えることができます。私たちもアモン人と同じく、主に刃向かった者ではないですか。神のひとり子である方が、人の姿となられ、貧しい姿をとられたことをいいことにして、さんざんこの方を侮辱し、十字架に追いやり、殺したのではないですか。そこまでののですから、本来なら私たち全員が神のさばきを受け、滅ぼされなければならないはずです。それなのにどうして私たちは、何もなかったかのようにならぬ恵みをいただいているのですか。主の十字架の契約があるからです。そのようにして救われるチャンスをぎりぎりまで残し、救いの手を差し伸べてくださっています。

今生きていることを当たり前のように思っていました。自分の思いのままにならないことで不満だらけの毎日を送っています。でも、どうでしょうか。神の赦しの恵みがなければ、主の十字架の契約がなければ、そのようにして救いのチャンスを残してくれなかったなら、私たちはとつくの昔に滅ぼされていたのではないですか。今ここに座ることができている。何でもないように見えますが、そのことも実は神の恵みであつたことに気がつきます。